国際開発学会第 31 回全国大会 12 月 6 日(日)
RT「若手部会セッション：変動の時代における知の役割」

若手と社会変動

討論者：　汪 牧耘（おう・まきうん）

東京大学大学院・新領域創成科学研究科
国際協力学専攻・博士後期課程

コロナによる若手への影響

- フィールドワークと研究の継続問題：新しい研究テーマや手法への変更
- 研究の応用性：自らの勉強・研究は社会問題に役立つか
- 自分の「矛盾」：現地に飛び込む→現地から逃げ出す

各発表の抽象化：変動と知の役割

- 宮川発表：規範・行動の変化（→漸近的ではなく、短時間で変わる）
- 大山発表：知識の浮き沈み（→不変の思考枠組み、時代背景と思想の連動）
- 石発表：変化への原因分析（→わかりやすさによる原因分析の単純化）

視点①：新しい外的「変化」に対して、社会の内的規範・行動は短時間で変化する。しかし、それらの経験から得た考え方や行動は、新しい「知識」として定着するとは限らない。

視点②：世界共通の思い出や閉鎖感による学者の関心や価値観の変化

総合討論：変動の中、知的創出の舵を取る

1. 社会変動と自らの研究や実践との関係をどう考えているか？

2. コロナは、国際開発学の知識の創出にどのような影響を与えるか？

→「エピステーメー」（先行的に物事の分類する眼差し）の変化も？

～16世紀末	事物の類似関係の解読	一体・全体論
古典主義時代	表象に「記号」を与え、表象の異同から秩序を付ける	分類・区別
18世紀末～	人間をはかりに表象を規定する	人間中心主義

M・フーコー、『言葉と物』

＊ その他の問題提起？